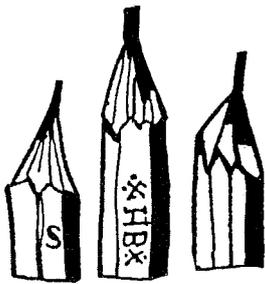


# 図書室月報

2023年(令和5年)3月5日

第718号

〈図書室のつどい 参加者の感想〉



もんぐろ まさひと  
門口正人著

## 『裁判官のつぶやき』に 参加して

なみ  
清水 菜見

最初のテーマは「裁判のなぞ」。裁判の仕事の内容やアメリカでは拘留所から電話で尋問した話等ちよつとシニールなお話を聞きました。その中で印象的なお話は、沢山話し合い等の段階を乗り越えて判決案ができたなら、まず一週間引き出しに寝かせた後、本当にこれで良いのか再度確認をするというもの。

人間の今後を左右する……家族や関係者も左右される。私だったら引き出しを開けて何度も確認をするかもしれない。でも別の仕事もあるんだもんな。その仕事も人間を左右させる仕事……と妄想してたら背中がぞつ!としました。

とある裁判官が無罪判決をしたら被告人(この場合は元被告人?)がニヤリと笑った話。再犯率が43%。門口先生が「騙された」と嘆くのではなく、騙されまいと警戒する」という言葉が印象的でした。次のテーマが「裁判官のなぞ」。裁判官は年末年始どうしてるの?という疑問から入りました。寒い中、屋根のあるところで過ごそうと犯罪に手を染める方が多いらしく、年末年始返上で令状、判決を書いていたりとのこと。

事件に追われていると裁判官は世間知らずと言われることもあるらしく、門口先生は「反論できない常識は世間にある。」と言いながらも「目の前にあるものを受け入れる」と言いました。それぞれの立場や生活が違うと世間の見え方が違うし、何をもちて世間を知っていることになるだろう。世間知らずかあ。と頭の中で考えていると門口先生が『若杉裁判長』という菊池寛が書いた短編小説を教えてくださいました。若者の被告人にやさしい人情味あふれる若杉裁判長が泥棒に会い考えが変わり、若者を有罪にするというお話。他人事だった事件が自分自身に降り注ぐ……人間はどこまで客観的になれるんだらう。経験でこんなにも変わってしまうんだから。

そして最後にお話しされたテーマ「裁判所のなぞ」。フランスで17人から性的被害にあった少年の事件で13人が無罪になった裁判のお話、裁判官みたく表に出ている方々以外にもたたくさんの裏方で働いている方がいるお話等を聞きました。

裁判所のお仕事の中で、罪を犯してしまった未成年が親と一緒に合宿をして親子作業したりする親子合宿。外で働くのを助ける補導委託。ボランティアと力を合わせてやっていることも沢山。

ここに書いたことよりも沢山教えてくださった門口先生。裁判官能面化の話や、ぼろつと「〇〇も立証責任あったらなあ……」「少しいだけ〇〇をおおらかな気持ちで……」と本音も見えつつ淡々と話をしてくださった門口先生の足元……特に右足がよく動いていました。裁判官って裁判中足元動いている時あるのかな。先生の足元に一番の人間味を感じました。

裁判って良くも悪くも人間味を一番感じられるかもしれない。ああ傍聴行ってみたい!今回お話を聞いてもつと身近に感じたかと思いましたが。そして早速門口先生がお書きになった本、『裁判官のつぶやき』を今読んでいます。ちよつとした門口先生流小ネタもちりばめられていてとても面白いです。

(法曹会)

ブッククラブから

## 松田青子 著 『女が死ぬ』を読む

津田 仁<sup>じん</sup>

この小説はジャンルにとられない53の短編により構成されている。内容は表題も含めてジェンダー問題を多く取り上げながらも、女性の就職の困難、男のエゴ、競争の不気味さ、カミングアウト、何気ない日常への気づき、国歌を歌わないことの意味、社会に対してノーと言うこと、商品の過剰サービス、人間の格付け、テクノロジの人間への反逆、など様々なテーマの中に、作者の豊かな感性と想像力、そしてそれを超えた妄想力が各作品に全開している。特に私の関心を引いたのはその妄想力である。

いま世界は気候変動や戦争、社会の枠組みや既成の価値観の崩壊など様々な事象や問題が同時多発的に起きており、その対応は今まで人類が培ってきた経験値や科学の力だけでは困難となりつつある。その閉塞した状況や思考をブレイクスルーし、世界を脱構築するためには今「妄想力」が求められているのではないだろうか。

作者はこの妄想力を作品の中に駆使して、日常の何気ない風景や問題に対峙しながらその世界を静かに脱構築している様に思えた。早速その妄想ワールドをのぞいてみよう。

ある作家が絵画の鑑賞方法として、一枚の絵画を30分かけてじっくり鑑賞すればその絵画がおのずと語りかけてくる。といった内容の言葉をどこかで読んだことがある。卓見である。しかし作者はそれを超え、「星月夜」(ゴッホの有名な絵)のなかで、絵画の鑑賞者自身がその鑑賞する絵画の中に入り込み、そこに住みその風景を体験することで絵画を味わうという実に豊かな妄想を働かせている。

「You Are Not What You Eat」では、主人公が食べた物をトイレで吐きはじめ、それは昨日の夕飯昼食から始まり、やがてかつて幼いころ食べたもの、あげくは見知らぬ人が食べたものまで次々と吐いていくというから不気味さを覚えながらもその妄想に圧倒される。また、「男ならではの感性」では現在の男性中心に作り上げられた社会を女性中心の社会に巧みに反転させ、物語の最後に男性ライターと男流作家に「なんだかすべてが馬鹿みたい」と気づかせ、その世界の滑稽さを暴きつつ、現代社会に蔓延するジェンダー差別の枠組みそのものを解き放そうとしている。

そして極めつけは「水蒸気よ永遠なれ」である。この

短編はタイトルのみで、何も書かれておらず2ページの空白が続く。この空白は何を意味するのか。空中に存在する水蒸気は目に見えない。その見えないものを表現するため空白にしたのか、あるいは実在しているが大切なものは目には見えない、と言いたいのか。とそこまで妄想したとき、突然私に作者の妄想が乗り移り次の作品を生んでしまった。

小説の名前は「妄想交流」、全208ページ53のタイトルによる短編集、内容は書かれていないが小説の冒頭に次のような言葉がある。「この小説は私が書いた渾身の一冊です。読者の皆さんは各短編のタイトルの上に人差し指をあて目を閉じ、思いっきり妄想を働かせてください。するとその指を媒介に私の作中に込められた声が聞こえてきます。その声に感応したあなたは自身の内なる声が生まれたことに気づきます。その生まれた言葉は今あなたが指を当てているページに書き込むのです。すべてのページが埋まったとき私とあなたの魂が交流した作品が出来あがります。幸運を祈ります。」

いかん、妄想の世界からカルトの世界まで飛び帰還できなくなりそうなのでこの辺で終わります。(中公文庫)



新着図書から

哲学 心理学 宗教	フルベッキ伝	井上篤夫 (国書刊行会)	198
〈歴史〉	戦時下、占領下の日常	エドガー・A・ポーター (みすず書房)	210
	地形で見る江戸・東京発展史	鈴木浩三 (筑摩書房)	213
	佐高信評伝選2	佐高信 (旬報社)	281
	昭和天皇拝謁記	田島道治 (岩波書店)	288
	荒畑寒村	川村邦光 (ミネルヴァ書房)	289
	江戸想像散歩	富岡一成 (旬報社)	291
	欧米の隅々	市河晴子 (素粒社)	293
	地図から信州が見えてくる	今尾恵介 (信濃毎日新聞社)	291
〈社会科学〉	女奴隷たちの反乱 レベッカ・ホール	(花伝社)	316
	自発的隷従の日米関係史	松田武 (岩波書店)	319
	「移民国家」としての日本	宮島喬 (岩波書店)	334
	隣人のあなた	安田菜津紀 (岩波書店)	334
	マイノリティ支援の葛藤	呉永鎬 (明石書店)	361
	外国人まかせ	澤田晃宏 (サイゾー)	366
	フェミニスト・シテイレスリー・カーン	(晶文社)	367
	ケアと支援と「社会の発見」	三井さよ (生活書院)	369
	みんなであつくりよう! SDCs 授業プラン	池田考司編 (旬報社)	375
	イタリアのフルインクルーシブ教育	アントネット・ムーラ (明石書店)	378
	柳田国男の民俗学構想	室井康成 (森話社)	380
お守りを読む	戦時下女学生の軍事教練	鳥居本幸代 (春秋社)	387
	ぼくは福祉で生きることにした	佐々木陽子 (青弓社)	393
〈自然科学〉	生き物が老いるということ	河内崇典 (水曜社)	396
	天気図からよみとく奥の細道	村山真司 (星海社)	451
	ルポ動物園	稲垣栄洋 (中央公論新社)	461
〈工業〉	それでも食べて生きてゆく東京の台所	佐々木央 (筑摩書房)	480
〈産業〉	振り返れば未来	山下惣一 (不知火書房)	610
〈芸術〉	時を超える美術	新島隆 (光文社)	702
	現代アートはすごい	布施英利 (ポプラ社)	702
	「表現の不自由展」で何があったのか	臺宏士 (緑風出版)	706
	「文化財」から「世界遺産」へ	中村俊介 (雄山閣)	709
	新海誠論	藤田直哉 (作品社)	778
〈文学〉	プロレタリア文学とジェンダー	飯田祐子 (青弓社)	910
	物語とトラウマ	岩川ありさ (青土社)	910
	目に見えぬ詩集 谷川俊太郎詩 (Book&Design)		911
	赤と青とエスキース	青山美智子 (PHP研究所)	91あ
	祝宴	温又柔 (新潮社)	91お
	終わりの始まり	ソユミ (書肆侃侃房)	92ソ

図書室のこころ

育ちすぎたタケノコでメンマを作ってみた。

—実はよく知らない植物を育てる・採る・食べる—

お話 玉置 標本(ライター)

ゴマってどんな姿で実るのだろうか。コンニャクを植えるところから手作りしてみた。育ちすぎたタケノコをメンマにできないか……。自然の中や家庭菜園からの食物調達をライフワークとする玉置さん。今回は普段何気なく口にしていて、でも実はよく知らない食材について、好奇心のままに育て・採り・食べることで得た、試行錯誤の記録をお話いただきます。

予想外の連続に悪戦苦闘するなかで、次第に明らかになる食材の魅力。ネットで瞬時に情報が手に入る時代ですが、自分で時間をかけて体験したからこそ得られる、オリジナルな結果がそこにはあります。

〈玉置さんの本〉『育ちすぎたタケノコでメンマを作ってみた。実はよく知らない植物を育てる・採る・食べる』(家の光協会)、『捕まえて、食べる』(新潮社) ほか

とき 4月2日(日)

昼2時〜4時

ところ 公民館 地下ホール

定員 60名(申込先着順)

申込 3月8日(水)朝9時〜

公民館 ☎(572)5141



図書室のついで

コーヒーの詩が語る

お話 小山 伸二(書肆梓代表)

この本は、15世紀にイスラームの地で生まれたコーヒー飲用の文化から、21世紀現在のコーヒーの新潮流までを、著者が親しんできた古今東西の書物から読み解き、縦横無尽に語り尽くします。本文ではいくつかの詩が引用されたり、巻末に約50頁にわたる注釈と参考文献が付いたり、いつものコーヒーがちよっと味わい深くなる一冊です。

著者は、辻調理師専門学校や立教大学で食文化を講じる文化人でもあり、国立市公民館で活動する「詩の会」にも通う詩人でもあり……。

小山さんは、「現代において、コーヒーを通して世界を考えることの重要性は増していることだろう。地域に住むぼくたちの、持続可能な世界を実現するために、コーヒーから見えてくる世界という視点はぜひとも必要だ」と述べています。ぜひ本書と小山さんのお話を通じて、いつもと異なる視点からコーヒーとその背景にある重層的な「世界」を眺めてみませんか。

〈小山さんの本〉表題作(書肆梓)、詩集『さかまく髪のライオンになって』(書肆梓)、『きみの砦から世界は』(思潮社) ほか。

とき 3月31日(金)夜7時〜9時

ところ 公民館 地下ホール

定員 60名(申込先着順)

申込 3月7日(火)朝9時〜

公民館 ☎(572)5141



〈私の本棚から 第6回〉

櫻井いよ著

『それでも僕らは、  
屋上で誰かを  
想っていた』



吉沢いより

タイトルにあるように、屋上という場所が主人公たちにとって大切な場所になっています。私がこの本を読むきっかけは、屋上という普段行く事がない場所がタイトルに入っていたからです。これを読んでいる皆さんは学校の屋上に行った事がありますか。私は小学生の時に一度だけ授業で行った記憶があります。そのときは、屋上で周りを見渡してどのような建物があるかを書き出すというものだったと思います。なので、普段は鍵が閉まっっていて、特別な時でないと入る事ができないイメージがあります。小説の中では、主人公たちは当たり前のように屋上に行きます。その非日常感が読んでとても心地よかったです。物語は五人の視点から描かれています。それぞれの視点から描くことができるので、一人の視点から描か

れている物語よりも、もどかしさだったり切なさだったりを感じる事ができます。なにが正解なのかわからなかった高校生活も、後から振り返ったときに全てが青春だったと思える時が来るのでしょうか……。

この小説は普段本をあまり読まない人にもおすすめです。もしかしたら、普段から本を読んでいる人にとっては物足りないかもしれません。なぜなら、それぞれのセリフが多いからです。その分、文章量が多くありません。なので、比較的短い時間で読む事ができると思います。彼らの過ごした青春をぜひ読んでみませんか。(宝島社文庫)

係から



少しずつ本格的な春が近づいてきました。

吉沢さんの「私の本棚から」は今回が最終回となります。毎回瑞々しい素敵な紹介をいただいで、本当にありがとうございます。

次回以降の「私の本棚から」もどうぞお楽しみに。